

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K01894

研究課題名（和文）幼児のファンタジーの体験および意味づけ - 幼児と養育者の関わりの素材としての活用

研究課題名（英文）Early childhood fantasy experience and meaning-use as a material for the relationship between infants and caregivers

研究代表者

岡本 直子 (Okamoto, Naoko)

立命館大学・総合心理学部・教授

研究者番号：50389615

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児がファンタジー（実在しないキャラクターや現実には生じ得ない現象）をいかに体験し意味づけるかに着目した。幼児のファンタジーの体験や意味づけについて、1. 幼児の間でのやり取りで観察されるファンタジー、2. 大人が与えるファンタジーの2側面から研究を行った。幼児の自由遊びや幼稚園行事、宿泊保育における参与観察と、幼稚園の先生方と卒園生親子を対象とした面接を実施した。その結果、幼児がファンタジーに主体的にかかわり、ファンタジーと現実を自由に行き来できること、成長に伴いファンタジックなキャラクターを現実のものではないと気付くようになる一方で、信じたい気持ちも存在することなどが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ファンタジーは本来、幼児に架空の世界での様々な体験を重ね考える機会を提供してくれる存在であるが、現代の幼児を取り巻く環境は商業目的のものも含め、大人が与えたファンタジーであふれている。本研究は、幼児のファンタジー体験と意味づけに着目し、幼児を主体としてファンタジーを再考することを試みた。幼児へのファンタジーの提供は良きことのような風潮があるが、本研究からは、ファンタジーの主導権を幼児に託し、見守る姿勢が重要であることが示された。この示唆は、幼児の養育者、教育者、そして幼児を取り巻く人々にとって幼児とのかかわりの手がかり、ひいては子育て支援に寄与するものとなると期待できる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on how infants experience and make sense of fantasy (characters that do not exist or phenomena that cannot occur in reality). To clarify this, we conducted research on, 1. Fantasy observed in exchanges between infants, 2. I conducted research from two aspects of fantasy given by adults. Observation while participating was conducted for children's free play, kindergarten events, and accommodation and childcare. Also, interviews were conducted with kindergarten teachers and parents and children of graduates. As a result, it was suggested that infants can be actively involved in fantasy and can freely switch between fantasy and reality. Moreover, it was suggested, as they grow up, they would realize that fantastic characters are not real, but they also have a desire to believe.

研究分野：臨床心理学

キーワード：幼児期 ファンタジー 現実 遊び 養育者 子育て支援 かかわり

### 1. 研究開始当初の背景

幼児は大人に比べ身体的、心理的、そして社会的にも発達の上にある。その幼児にとってファンタジー（本研究では、実在しないキャラクターや実際に生じえない現象を指す）は本来、架空の世界で様々な体験を重ね考える機会を提供してくれる素材である。しかし現代はファンタジーの主導権を幼児ではなく大人がもち、幼児を取り巻く環境は大人が与えたファンタジーで溢れている。幼児向けの教育番組や書籍では、擬人化されたキャラクターが登場する。幼稚園や保育園の行事には大人がサンタクロースや節分の鬼に扮して登場する。また、幼児が言うことを聞かない場合も、鬼、お化け、幽霊などを引き合いに出し、脅して従わせようとすることもある。今一度、一方的にファンタジーを与えるのではなく、

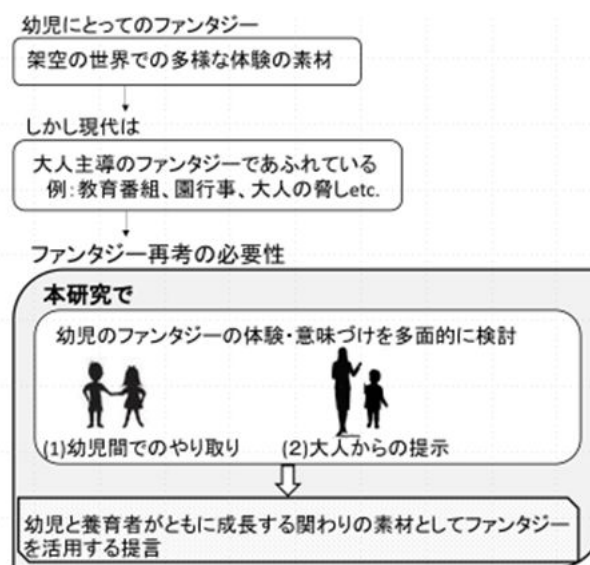


図1 本研究の着想の流れ

幼児を主体としてファンタジーを再考する必要性、すなわち幼児がファンタジーをどのように体験し意味づけているかを考える必要性がある。（図1）

これまで心理学の領域を中心に、ファンタジーと現実の区別に関する課題を幼児に与え遂行程度を調べる実験が重ねられてきた。また、ファンタジックなキャラクターとしてサンタクロースに着目し、各年齢段階の幼児がサンタクロースを信じている割合に関する実験や調査も行われてきた。しかし、ファンタジーが生じる状況を踏まえた多面的な検討はこれまでなされていない。一口にファンタジーと言っても、(1)他児とのやり取りから生じる場合、(2)大人から与えられた場合、によってその体験や意味づけは異なる。

幼児にとってのファンタジーの体験や意味づけを明らかにすることは、幼児の心を理解し、より良い関わりを模索することにつながる。それに加え、養育者への支援にもつながろう。子育て、特に幼児期の子育ては、養育者と幼児の双方向の関わりである。しかし現代は、「子どもが何を考えているかわからない」、「子どもとどう関わっていけば良いのだろうか」と悩む養育者も少なくない。幼児と養育者がともにファンタジーを共有することで架空の体験が可能となり、現実の不安や問題の解決につながる、ひいては互いの成長につながると思った。本研究を通して、大人主導のファンタジーに溢れた現代の幼児を取り巻く環境を再考し、幼児にとってのファンタジーの体験と意味づけを多面的に明らかにする。そして、幼児と養育者がともに成長する関わりを素材としてファンタジーを活かす手立てを提言することを目的とした。

### 2. 研究の目的

本研究ではこれらの示唆を出発点とし、幼児のファンタジーの体験や意味づけに関して、ファンタジーが生起する状況を踏まえて考察を目指した。このため、(1)幼児の間でのやり取り、(2)大人からの提示、の2側面から観察される現象に基づき、幼児のファンタジーの体験と意味づけに着目した。具体的には、(1)幼児の間でのやり取りについては、幼児の間でのやり取りで観察されるファンタジーの体験および意味づけについて明らかにする目的から、自由遊びにおける参与観察を行った。(2)大人からの提示については、大人から提示されるファンタジーに対する幼児の体験および意味づけについて明らかにする目的から、サンタクロースや節分の鬼などのファンタジックなキャラクターが登場する園行事における幼児の参与観察を行った。また、年長児に対しては夏季に2泊3日間キャンプ場で実施される宿泊保育に同行し、朝起きてから就寝するまでの幼児と行動をともしながら幼児の言動に注目した。加えて、ファンタジーを提示する大人の意図や、幼児期にファンタジーを受けた子どもがファンタジー体験をどのように思っているか、それが彼・彼女らの今、どのような意味をもたらしているかにも着目した。

### 3. 研究の方法

#### (1)自由遊びにおける参与観察

幼児同士のやり取りのなかで観察されるファンタジーの内容、体験、展開、意味づけに関する知見を得る目的から、A 幼稚園に出向き、朝の自由遊びの時間における園児の参与観察を行った。

観察者が幼児と関わる参与観察の形を取った。ファンタジーの内容や展開とともに、ファンタジーが生じている際の幼児の様子や幼児の語り、そして幼児の間でのやり取りにも着目した。参与観察の内容は参与観察後に詳細な記録に残した。

#### (2)園行事におけるファンタジーに関する参与観察

大人から提示されるファンタジーに対する幼児の反応、体験、意味づけについて考究するための知見を得る目的でA幼稚園で実施した。誕生会、七夕会、宿泊保育、作品展、クリスマス会、豆まき、ひな祭り会などの、ファンタジックなキャラクターが出没もしくはファンタジックなテーマが出現する園行事に出向き、園児に関わりながら、観察し、その様子をビデオで撮影した。ビデオのみでは抜け落ちがちで微妙な空気感を大切にするため、毎回、フィールドノートで詳細な記述を行った。園行事におけるファンタジーの内容や展開とともに、ファンタジーが生じている際の幼児の様子や幼児の発語、そして幼児の間でのやり取りにも着目した。

また、年長児を対象に夏季にキャンプ場で実施する2泊3日の宿泊保育に同行し、朝起きてから夜寝るまでの園児に参与観察を行った。歯磨きや着替えなどの日常の営みと、家庭から離れた非日常、そして火の神様が登場するキャンプファイヤーなどに対する幼児の体験および意味づけに着目した。

#### (3)幼稚園の先生方を対象とした、ファンタジーに関するインタビュー

幼稚園の先生方がファンタジーを媒介としてどのように園児達と関わっているか、それが園児たちにどのような意味をもたらしているかを明らかにするため、A幼稚園の先生方12名を対象にインタビューを実施した。園行事や普段の保育のなかで登場するファンタジー、その時の園児の反応、先生方の考えなどについて尋ねた。インタビューの内容は本人達の了承を得た上で録音した。

#### (4)卒園生と保護者を対象とした、ファンタジーに関するインタビュー

卒園生が幼児期のファンタジー体験をどのように思っているか、それが彼・彼女らの今、どのような意味をもたらしているかを考察する目的、そして、保護者が我が子の幼児期のファンタジーにどのように向き合っていたかを考察する目的から、A幼稚園卒園生親子(子の年齢はインタビュー時小学1年生)9組を対象にインタビューを実施した。お誕生会のプレゼント(A幼稚園では、毎月誕生会が開かれた。誕生付きの園児は、保護者が事前に内緒で作ったペンダントや冠、ティアラを「神様からのプレゼント」ということにして手渡されていた)にまつわるエピソードを中心に、幼児期のファンタジー体験を今振り返ってどのように考えているかについて尋ねた。保護者には、お誕生会のプレゼントにまつわるエピソードを中心に、我が子の幼児期のファンタジーにどのように向き合っていたか尋ねた。インタビューは誘導的にならないよう配慮した。また、幼児期のファンタジー(サンタクロースや誕生日のプレゼントをくれた神様など)を卒園生がまだ信じている可能性もあるため、問い方にも配慮した。卒園児と親のインタビューは個別に行い、親のインタビューの際にはその内容を卒園児が聞かないための配慮から、卒園生にはインタビュー補助者が対応した。インタビューの内容は本人達の了承を得た上で録音した。

## 4. 研究成果

上記の研究から次のような示唆が得られた。

#### (1)自由遊びにおける参与観察から得られた示唆

自由遊びにおいては、ままごと、レゴブロック、ブロック、プラレイル、お絵かきなど、常に4つ以上の遊びが教室内で展開していた。

例えば、年少児たちの間で人気がある遊びの1つがおままごとであった。おままごとをする際にはおままごとコーナーにマットを敷き、上履きを脱いで遊ことが約束事になっていた。おままごとで遊んでいる園児達は、お母さん役や子ども役など、自分の役に応じた声色で遊んでいたが、他児が上履きを履いたままおままごとに加わろうとすると地声にもどり、「上靴脱いで」と他児に伝えていた。この様子からは、上靴での侵入によりおままごとというファンタジーの世界が脅かされるのを嫌うのではないかと考えられた。

また、自由遊び用に布が数枚用意されていたが、この布が遊びのなかで、ドレス、スカート、マント、帽子、毛布など、様々なものに見立てられ、遊びが展開していった。

このような自由遊びの様子からは、幼児がファンタジーに主体的にかかわり、ファンタジーと現実を自由に行き来していることが推察された。

#### (2)園行事におけるファンタジーに関する参与観察

ファンタジックなキャラクターが出没する七夕、節分などでは、年少児ほどそれらを現実のものとして受け止めていた。年長児の場合、「これ、本当は〇〇先生やで」と言う園児が増えていた。しかし、例えば「織姫様、もうお空に帰らったよ」との先生の言葉に優しい表情で空を見やるなど、どこかで信じている、もしくは信じていたい気持ちが存在することがうかがえた。

また、A 幼稚園の年長児の宿泊保育では、毎年、キャンプファイヤーの際に先生が扮した火の神様が現れることになっていた。3 年間宿泊保育に同行したが、火の神様の正体について言及する園児はほとんどいなかった。キャンプファイヤーの後、火の神様からのプレゼントとしてプレズレットが園児達に渡されるが、ほとんどの園児が卒園式まで手首に付けて登園していた。

これらのことから、幼児は成長とともにファンタジックなキャラクターを現実のものではないと気付くようになる一方で、信じたいという気持ちが存在することが示唆された。

#### (3) 幼稚園の先生方を対象とした、ファンタジーに関するインタビュー

インタビューからは、大きな何かに見守られているという感覚を園児にもってほしいという思いが語られた。また、園児の工作を展示する作品展という行事の準備に入る時に、A 幼稚園では「製作の神様」が登場する。そして、幼稚園の中央廊下に「製作の神様」の分身が吊り下げられる。園児は糊付けやハサミでの切り取りなどの作業に行き詰まると、パワーをもらいに製作の神様を触りに行くよう先生に促される。すると、園児達は「パワーをもらえた！」と言って作業にもどるということである。これは、当該園児が作業をやりきる力があるが、失敗で気持ちが萎えている時に、「できるよ」という言葉がけだけでは不十分であること、「神様の力を借りて」なら乗り越えられることが多いことが先生方から語られた。自分に負けそうな時にファンタジーに守られる体験が重要であることが示唆された。

自由遊びや幼稚園行事の際に報告者も感じたことであるが、「言うことを聞かないと鬼がくるよ」というような、先生方の都合でファンタジーが使われることは無かった。このことについては、「ファンタジーは子ども達のその後の力にしてほしいから」と語られた。

これらのことから、幼稚園教育においてファンタジーが有効に活用されていること、またその活用は熟慮の上でなされていることが示唆された。

#### (4) 卒園生と保護者を対象とした、ファンタジーに関するインタビュー

卒園生のインタビューからは、幼稚園時代のファンタジーを今でも信じている児童、当時は実は実在しないと気付いていたと振り返る児童、今は実在しないと気付いたがその思い出のもの（誕生会のプレゼントや火の神様からのプレゼント）を大切にしている児童など、その様相はそれぞれであった。全員が、ファンタジーに対して肯定的もしくは中立的な様子であることがうかがえた。

保護者のインタビューでは、ある保護者からは、サンタクロースへの手紙と自宅の地図を毎年我が子と一緒に書いたエピソードが語られ、ファンタジーを我が子と間接的にかかわる意味不思議な体験として楽しんでいた様子が示唆された。別の保護者からは、誕生会のプレゼントは神様ではなく親が作っているということ年長のきょうだい伝えてしまい、本人がふてくされてしまったエピソードが語られた。信じたいという気持ちが幼児には存在することが示唆される。

これらの示唆から、以下の提言が行えよう。

幼児は現実とファンタジーを柔軟に行き来する。ファンタジーに埋没するのではなく、必要に応じて現実に立ち返ることができる。大人から提示されるファンタジーに関しては、それが実在しないことを成長にとめない気付くようになり、「本当は違う」などの発言がなされることもある。しかし、内心は信じたい気持ちも有しているということを大人は理解する必要がある。ファンタジーを提示する場合、大人はそれが幼児のためであるかを熟慮する必要がある。大人の都合で幼児を従わせるためにファンタジーを用いてはならない。幼児の信じたい気持ちを大切に、行き詰まった場合に乗り越える力となりうるものを与えたいという気持ちから大人がファンタジーを提示する場合、本人は成長後もファンタジーを良い思い出とする。少なくとも否定的なものとは思わない。大人は、ファンタジーが誰のためのものかを念頭に幼児に接する必要がある。

しかし、残念ながら大人がファンタジーを扇動する、しかも、悪用するケースも存在する。例えば、鬼やお化けから電話がかかってくるスマートフォンのアプリ「おにから電話」というものがある。このアプリは、幼児が言うことを聞かない時に、鬼やお化けが電話越しに幼児を脅かし、「しつけのサポートをする」というものである。現代は、スマートフォンなどのメディアの発展・普及にとめない、大人がファンタジーを利用する風潮がどんどん強まっている。こういった形のファンタジーは幼児のためのものではなく、大人が楽しんだり面白がったりするためのものになっている。もちろん、昔も「そんなことしたらお化けが来るよ」と大人が言うことはあったが、「おにから電話」のようなものは、鬼から本当に電話がかかってくるため、幼児に与える衝撃は大きい。ともすると心の傷にもなりかねない。大人は、誰のため、何のためにそれを用いるのか、考える必要がある。

ファンタジーはその内容も質も多様であり、一概に善し悪しの価値判断を行うことが難しい場合もある。扇動せず、自然発生的なものは見守るということがまず大人には求められると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岡本直子	4. 巻 593
2. 論文標題 幼児にとってのファンタジー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子どもの文化	6. 最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 與久田 巖・岡本直子	4. 巻 59
2. 論文標題 精神疾患にNIRSを用いた先行研究の概観 - NIRSによる思考場療法の有効性の検討に向けて -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 大阪夕陽丘学園短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡本直子	4. 巻 49
2. 論文標題 幼児期における現実とファンタジー - 商業主義やメディアによるファンタジーが氾濫する現代に生きる幼児へのかかわりのヒントとして -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 モンテッソーリ教育	6. 最初と最後の頁 64-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 與久田 巖・岡本直子	4. 巻 61
2. 論文標題 鎖骨呼吸法の効果検証に向けた探索的検討 - fNIRSを用いて -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪夕陽学園短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 MORIKAWA, Ayame・OKAMOTO, Naoko
2. 発表標題 The efficacy of a new self-training program of Heart Rate Variability Biofeedback and Thought Field Therapy to improve anxiety, insomnia, and quality of life
3. 学会等名 21st International Energy Psychology Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂口龍也・岡本直子
2. 発表標題 コラージュ制作における気分変化及び質的差異の検証 箱庭制作と比較して
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OKAMOTO, Naoko
2. 発表標題 What therapeutic meanings does touching paints (pigments) have in finger painting?
3. 学会等名 International Congress of Psychology 2016 (ICP 2016) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 OKAMOTO, Naoko・YOKUDA, Iwao
2. 発表標題 What is caused by CB2? -Exploratory study using fNIRS-
3. 学会等名 20st International Energy Psychology Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 MORIKAWA, Ayame・OKAMOTO, Naoko・YOKUDA, Iwao
2. 発表標題 A Pilot Study on Autonomic Improvement of Thought Field Therapy for Trauma Treatment
3. 学会等名 20st International Energy Psychology Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関